

## 幼子イエスの神殿参り

ルカによる福音 2:22-40

モーセの律法に定められた彼らの清めの期間が過ぎたとき、両親はイエスを主に献げるため、エルサレムに連れて行った。それは主の律法に、「初めて生まれる男子は皆、主のために聖別される」と書いてあるからである。

また、主の律法に言われているとおりに、山鳩一つがいか、家鳩の雛二羽をいけにえとして献げるためであった。

そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた。シメオンが“霊”に導かれて神殿の境内に入って来たとき、両親は、幼子のために律法の規定どおりにいけにえを献げようとして、イエスを連れて来た。シメオンは幼子を腕にき神をたたえて言った。

「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり

この僕を安らかに去らせてくださいます。

わたしはこの目で

あなたの救いを見たからです。

これは万民のために

整えてくださった救いで、

異邦人を照らす啓示の光、

あなたの民イスラエルの誉れです。」

父と母は、幼子についてこのように言われたことに驚いていた。シメオンは彼らを祝福し、母親のマリアに言った。「御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするために定められ、また、

反対を受けるしるしとして定められています。

——あなた自身も剣で心を刺し貫かれます

——多くの人の心にある思いがあらわにされるためです。」

また、アシェル族のファヌエルの娘で、アンナという女預言者がいた。非常に年をとって、若いとき嫁いでから七年間夫と共に暮らしたが、夫に死に別れ、八十四歳になっていた。彼女は神殿を離れず、断食したり祈ったりして、夜も昼も神に仕えていたが、そのとき、近づいてきて神を賛美し、エルサレムの救いを待ち望んでいる人々皆に幼子のことを話した。

親子は主の律法で定められたことをみな終えたので、自分たちの町であるガリラヤのナザレに帰った。幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた。

## 説教

ヨセフとマリアはエルサレムヘイエスの初宮詣でに参ります。そこで一家はシメオンとアンナに出会います。

聖霊からメシアに会うまでは死なない、とお告げを受けたシメオンは神殿でイエスを見だし、腕に抱いて救世主が到来したことを神に感謝しました。そして29節から32節にかけてシメオンの賛歌、ヌク・ディミティス「今こそ主よ、僕を去らせたまわん」をうたいます。この賛歌は就寝前の祈りとしていまでも親しまれています。また84歳になる未亡人アンナは神殿で日々、祈りと断食をして神に仕えていました。イエスが両親に連れられてエルサレム神殿にお参りしたとき、イエスをメシアと悟り、女預言者として救い主イエスの到来をエルサレムの救いを待つ人々に告げ知らせました。

わたしはきょうの福音箇所をイエスのお宮参りのエピソードとして、ヨセフとマリアは男預言者と女預言者に出会ったお話、有名なシメオンの賛歌を説明するサイドストーリーとして受けとめ、なかなかイエスのリアルな誕生秘話として受け止めることができずにいました。でも、これは旧約から新約へ

の福音なのではないかと気づきました。

マリアとヨセフは旧約の定めに従って、つまり律法に従って割礼、初子奉獻をおこないました。一家の目的地のエルサレム神殿には一見すると古臭い人にみえるシメオンとアンナがいました。しかし彼らは聖霊に従って神殿にいました。

旧約＝律法、新約＝聖霊だとすると、旧約の定めどおりに神殿に向かったイエスの両親は旧約タイプ。聖霊がとどまる人、シメオンとアンナは新約タイプです。このエピソードはマリアたち若夫婦が新しいのではなく古く、年長いたシメオンと84歳のアンナの男女が新しいというあざやかな対比になっています。エルサレム神殿を舞台に展開するこのエピソードのほんとうのところは、聖家族と呼ばれている若いヨセフ一家が聖霊がとどまっている年長いた男女シメオン、アンナによって、新約の恵みを見出す、生後40日の幼子イエスの救いを受けることを印象的に描いています。

ただ、シメオンが賛歌の後にマリアへの予告「あなた自身も剣で心を刺し貫かれます」とあるようにその救いは簡単ではありません。その深い意味合いをヨセフ一家がほんとうの意味で知るのはまだ後のことになります。奉獻の出来事としてこのエピソードが伝えられていること、またその福音を味わえることはわたしたちにとっての大きな喜び、主からのめぐみの賜物です。

-----